

続・吉田宗恂とその周辺 ―コンピュータと図書館を活用して―

時慶記のキリシタン(4) 客人の謎

島野達雄

松田毅一は、秀吉の正室・北政所に仕える教名マグダレーナというキリシタンの老婦人が、「きゃくじん (Magdalena Quiacuzin)」と呼ばれたと指摘している^[1]。

本稿では、『時慶記』にあらわれる「客人 (お客人)」の記事を示し、客人はマグダレーナの別名すなわち固有名詞であると同時に、人々のキリシタン信仰を支える役目をもった、特定の信者をあらわす用語であることを明らかにする。

また、マグダレーナの夫の「ジョアン・シンサ・ガヨ (João Xinça Gayo)」は、慶長年間、客人と同じ日にしばしば登場する「長野殿」である可能性を検討する。

1. 時慶記にあらわれた客人

『時慶記』に「客人」が登場するのは、文禄 2 年 (1593) 5 月からである。

北政所ヨリ米五石女房衆へ給、御客人ヨリノ文也、返事申遣、切手[カ]石川伊賀守[光重]へ被遣候 (文禄 2.5.10=1593.6.9 水)

この年 12 月には、時慶から客人に贈物をおくったが、客人は留守だった。

客人方へ中折 (なかおり、和紙) 一束遣候、他行ト也 (文禄 2.12.24=1594.2.14 月)

松田毅一によると、大坂城の建設が進む 1583 年 (天正 11 年)、「きゃくじん」と呼ばれ、教名をマグダレーナともマダネーラともいう北政所の秘書というべき人がいた^[2]。

文禄 2 年の『時慶記』の二つの記事では、まさしく「御客人」が北政所の秘書のように手紙を送っている。二つの記事は固有名詞としての「客人」つまりマグダレーナ (マダネーラ) という女性キリシタンの存在を裏付ける貴重な同時代史料となっている。

越えて慶長 7 年 (1602)、二代目曲直瀬道三 (正紹玄朔) のところと、時慶の息子とみられる大膳亮長栄^[3]のところに「客人」が滞在した。

道三へ遣状、客人在之由也 (慶長 7.5.16=1602.7.5 金)

大膳亮へ遣人、客人在之ト (慶長 7.5.22=1602.7.11 木)

この二つの記事の「客人」(索引には欠落)は、日付が近いことから同一人物と考えられる。ただし、天正 11 年の客人、文禄 2 年の客人、この慶長 7 年の道三の客人および大膳亮の客人がすべて同じ人物とは断定できない。

2. 上下四十人で石山寺に参詣

翌慶長 8 年 (1603) 3 月、西洞院家の家族や使用人のほか、時慶の妻の姉妹とみられる^[4] 孝蔵主など、主従四十人ばかりで真言宗石山寺に参詣した。この大集団には「客人」も加わっている。この日、時慶は全員に食事を提供した。俗にいう大盤振舞いである。

石山詣（もうで）上下四十人斗，長野殿・ヤヤ・新内侍・喝食長・少納言同心也，又孝蔵主同心候，客人ト云田舎衆ノ由候，ホホト云人，其外余多，同道衆五十余〔在〕之，皆々予振舞申付候，（慶長 8.3.17=1603.4.28 月）

一行は、秀頼御袋つまり淀君が再興の支援をした石山寺の堂舎はもちろん、本尊や紫式部ゆかりの源氏の間などを見物したあと、同じ大津の三井寺におもむいた。時慶は「鐘見事也、声を聞」と書き残している。

ここでの客人には、「田舎衆ノ由」と説明がある。天正 15 年（1587）には、

老母へ見廻，山科へ田舎殿へ又衛門遣也，宇治へ被越由ニテ帰也（天正 15.4.11）

と、「へ」が重複した不自然な日本語だが、山科（やましな）地区に住む「田舎殿（夷中殿とも書く）」という田舎衆の代表とみられる人物が登場している。

田舎殿と時慶の老母とは、天正年間から親密な交際があったようである。

夕方老母〔時慶母〕ニテ田舎殿振廻アリ（天正 15.5.2）

老母・田舎殿同心ニテ来臨ソ（天正 15.6.27）

及夕老母へ行、盃給、田舎殿ニ逢候（天正 19.6.2）

下の慶長 9 年（1604）の記事から田舎殿は女性であることがわかる。

田舎殿ト云ハ帥局嬢の由候（慶長 9.9.4）

嬢（おば）は、配偶者または母親の姉妹を指す。帥局（そちのつぼね。今局とも）は女院御所と呼ばれた勧修寺晴子の女官を指している。元和 4 年（1618）には、帥局の母親が客人方から菓の返礼をした、という記事がある（次章参照）。

松田毅一の『南蛮史料の研究』の索引に田舎殿はない。田舎、田舎衆を指す「ynaca, inacas, jnacas」という表記は、西欧文献にあるようである⁵。

天正 15 年の「山科へ田舎殿へ」の記事から、天正 15 年には田舎殿は山科地区に住んでいたと言える。また、慶長 8 年の石山寺参詣、慶長 9 年の「田舎殿というは帥局の嬢のよし」から、慶長年間の「客人」は田舎衆の一人であり、帥局の嬢（おば）であることがわかる。

4. 客人は一人ではない

文禄 2 年（1593）にはじまり、道三玄朔および大膳亮長栄のところに滞在した慶長 7 年（1602）、そして石山寺の集団参詣をおこなった慶長 8 年（1603）から、直近の翻刻刊行済みの元和 4 年（1618）まで、じつに 25 年、85 ページにわたって、『時慶記』には「客人」が登場する。（〔付録〕参照）

客人来儀也，又新内侍〔西洞院時子〕客（客人の略であろう）モ（慶長 8.6.7）

少納言（西洞院時直）方ニハ客人在之，終日終夜也（慶長 9.2.22）

客人来，夜ハ帰也（慶長 10.3.25）

高台院殿（北政所のこと）ノ客人へ折一・雪魚五・指樽遣候（慶長 14.1.13）

朝ヨリ孝蔵主来儀候，客人アリ，持セ諸白樽ニツアリ，則予へ給（慶長 14.5.22）

孝蔵主被帰候，御客人衆在之ト（慶長 14.6.5）（索引に欠落）

於此亭齋も局より被申付候，・柳原[業光]ノ客人又舟橋[秀賢]ノ客人等也（慶長 18.8.7）
帥殿ノ母義客 [人] 方ヨリ去春薬礼トシテ諸白樽一・生ハム二筋被贈礼文遣候（元和 4.9.9）

これらの記事をよく見ると、「客人ト新内侍客モ」，「柳原ノ客人又舟橋ノ客人」のように，同じ日に二人の客人が登場している。「御客人衆」と複数形の表記もある。

さらに「高台院殿ノ客人」は，高台院つまり北政所に仕えた教名マグダレーナ（マダレーナ）の「客人」のほかにも客人がいたことを示唆している。客人が固有名詞であれば，わざわざ「高台院殿の客人」とことわる必要がない。つまり客人は一人ではないのである。

では，客人は単に「お客」を意味する一般名詞なのか。

そうではないと考える理由を次に述べよう。

5. 長野殿の謎

25 年 85 ページにわたる客人の記事には，約半分の 41 ページに「長野殿」という謎の人物が登場する。そのうち客人と長野殿が同じ日に出現し，二人が並置されているものは 16 日におよぶ^[6]。（〔付録〕参照）

最初にあらわれるのが，先述した慶長 8 年 3 月 17 日の石山寺集団参詣である。そこでは，「長野殿・ヤヤ・新内侍（時慶の娘。禁中に出仕した西洞院時子）・喝食長（時慶の娘で東福寺の喝食となる）・少納言（時慶の長男・時直）同心也，又孝蔵主同心候，客人ト云田舎衆ノ由候，ホホト云人，其外余多」と長野殿が筆頭になっている。

同年 5 月 23 日条には，「内儀ニ八月待ニ客人，又客（客人の略であろう）等之衆ヲ呼，長野殿也」と，長野殿が「客等ノ衆」つまり客人の一人である，と書いてある。

慶長年間の庚申（かのえさる）の日には，長野殿と客人その他が集まっている。

庚申也，夜則読也，長野殿斗来儀也，又客人モ（慶長 8.7.6.）

長野殿・チヨホ・客人来儀也，庚申待トギ（伽）也（慶長 8.11.8）

庚申守七人也，内儀立願也，長野殿へ長左衛門尉母・同長左・予・客人・喜蔵母，以上，又北来（慶長 9.10.14）

庚申守候，平内侍代，・・長野殿伽也，客人モ来候（慶長 14.2.8）

庚申待（庚申守，月待）とは，見ざる・言わざる・聞かざるの三猿をまつり，女性の安産や一同の無病息災などを祈願して，参加者が夜通し語り合う民間の習俗をいう^[7]。キリシタン信仰を庚申信仰に偽装したと考えられる遺物も発見されている^[8]。

ここでの庚申待は，「夜則読也」「長野殿伽也」とあるので，長野殿を中心に書物を読んだり，長野殿の話の聞いたりする場であったと考えられる。

慶長 15 年（1610）6 月の時慶の息子と見られる大膳亮長栄の葬儀の前日には，

夜半迄時直（時慶の長男）候，長野殿等後生物語候（慶長 15.6.29）

と，後生つまり死後の世界について，長野殿たちが語っている。

葬儀当日には、長野殿が時慶夫人の代理をつとめた。

此方ヨリ内儀代ニ長野殿、輿御添ニ与吉、カツキ衆三人、侍ニハ左近丞、少納言（時直）ヨリ勘左衛門遣候、内儀ハ忍テ見物候、輿添ニ長左衛門遣候（慶長 15.6.30）

時慶自身がキリシタンであったか、またはキリシタンにきわめて近い位置にいたとする仮説を是とすれば、以上の記事から、長野殿は、時慶夫人をはじめ時慶の家族のキリシタン信仰を支える指導者のような立場にあったと判断することができる。

長野殿は、先にのべたように、客人の一人であった。

北政所に近侍した「マグダレーナ（マダレーナ）客人」をふくめ、客人は、神父や修道士などの聖職者ではないものの、キリシタン信仰の真髄を人々に伝え、信仰の灯を守らせる役目をもった特定の信者を意味しているのではないだろうか。

6.長野殿とジョアン・シンサ・ガヨ

慶長 15 年 4 月 6 日条などに「長野殿息」、慶長 18 年 7 月 9 日条に「長野殿の女（むすめ）勝」があらわれており、当時の息、女の書例から考えれば、長野殿は男性である。長野殿と客人が同じ日に出現する 16 日分の記事のうち、幾つかの記事は、長野殿と客人が縫物の得意な夫婦である可能性を示している。（共は複数形を示す）

長野殿・客人等縫物共在之（慶長 9.閏 8.18）

長野殿・客如昨（慶長 9.閏 8.19）

客人来儀、終日雇、長野殿来儀、長左母来、左近丞来（慶長 10.4.1）

客人雇置（慶長 10.4.2）

客人来義、久中絶也（慶長 10.8.4）

長野殿来儀、把針（慶長 10.8.5）

慶長 9 年（1604）閏 8 月には、二日連続で時慶邸において長野殿と客人は縫物をおこなった。慶長 10 年 4 月には客人だけが二日連続で雇われ、初日には長野殿が顔を見せた。同年 8 月には、久しぶりに客人がやってきた。翌日には長野殿が来て、把針（はしん）つまり縫物をおこなった。

二人そろって時慶の屋敷で縫物にいそしむ光景を想像すると、この二人は夫婦としか考えられない。しかも、二人は扶持を誰からももらっていないようである。時慶が客人だけを雇ったように書いているのは、長野殿への配慮であろう。

かりに、『時慶記』初出の文禄 2 年（1593）の客人と、上の 17 年後の慶長 10 年（1610）の客人がマグダレーナ（マダレーナ）と呼ばれた北政所の侍女であったとすると、その夫のジョアン・シンサ・ガヨには長野殿が該当する。

シンサ・ガヨは、秀吉の警固にあたっていたが、天正 15 年（1587）の伴天連追放令のあと、秀吉によって追放され、大坂の屋敷やミヤコにある屋敷を没収されたことが知られている⁹⁾。また、天正 16 年（1588）に五畿内の信者の代表者たちが、「これからひどい迫害が始まるかもしれないが、われら五畿内の信者は皆死を覚悟している」とイエズス会総長に書き

送った書状の翻訳文の最後には「Xinça Gayo」の名前がある^[10]。おそらくシンサ・ガヨは、京都のキリシタンを代表して、署名を残したのであろう。

『時慶記』の初出記事は、客人が文禄2年（1593）、長野殿が慶長5年（1600）でどちらも伴天連追放令以後にあたる。むろん追放後のシンサ・ガヨに扶持は与えられなかった。

本稿で紹介した長野殿と客人の記事は、シンサ・ガヨの経歴に符合していると言えるのではないか。

長野殿が秀吉を警固した侍であり、通名がシンサと略される新左衛門または新三郎である^[11]、とする史料は、国内外を通じて発見されていない。長野殿＝ジョアン・シンサ・ガヨとする説は、想像の域を出ていないと言わざるをえない。だが、『時慶記』には、本稿の冒頭に示した文禄2年の客人の記事をはじめ、西欧側史料に符合する多くの記事が存在するのも事実である。

ねばならぬ真実を追求するのが歴史学の使命である。われわれは価値ある仮説を打ち立てて、検討に検討を重ねて真実を発見しなければならない。（平山諦『和算の誕生』）

-
- [1] 松田毅一『近世初期日本関係南蛮史料の研究』1967. 796p. イエズス会 1605 年（慶長 10 年）版書簡集. 1596 年（慶長元年）のプロイス年報ローマ版でも *Quiacuzin* であるという。マグダレーナを小西立佐の夫人とする説が誤っていることは、この本の 168-169p に明らかにされている。
- [2] 松田毅一『南蛮太閤記』朝日文庫 1991. 244p. マグダレーナとマダレーナのつづりは異なるが、夫はどちらも「ジョアン・シンサ・ガヨ」であるので、マグダレーナとマダレーナは同一人物とみられる。
- [3] 慶長 15 年 6 月 30 日の大膳亮長栄の葬儀に、時慶の内儀は参列せず、代人に「長野殿」を立て、内儀自身は「忍（しのび）て見物」している。ここから長栄が時慶の息子であるという推定が成り立つ。時慶記のキリシタン(1)。
- [4] 藤井謙治編『織豊期主要人物居所集成・第 2 版』2016 の藤田恒春執筆「孝蔵主の居所と行動」460p.
- [5] 松田毅一 377p. 「府内のイナカ」という表記例が示されている。豊後の旧・西国東郡の三重村・夷（えびす）には、吉田光由のものと伝えられる無銘墓と弟子の渡辺藤兵衛の墓がある。「姨（おば、イ）」の旁が「夷」であることから「夷中＝イナカ」となったのかもしれない。
- [6] 客人と長野殿の二つが同じ日であるが、相互に関連がない別々の項目にあがっている日は、6 日ある。
- [7] 柳田国男『年中行事覚書』の「話は庚申の晩」。昭和初期には 2 か月に一度の「庚申の日」の会合が全国いたるところで見られた、とある。
- [8] 都内の切支丹坂が庚申坂とも呼ばれたように、キリシタン信仰の庚申信仰偽装がうかがえる「十字架をもった庚申（青面金剛）像」などの遺物が国東半島ほかで発見されている。
- [9] 松田毅一 794-795p.
- [10] 松田毅一 1008p. 他には、小西行長の兄で、立佐の長男である小西如清、堺の日比谷了珪、河内の三ヶサンチョ・伊地智文太夫・池田丹後守など五畿内のキリシタンを代表する信者の名が見える。
- [11] 松田毅一 795-796p に曾呂利新左衛門こと坂内新左衛門をシンサ・ガヨに当てる説が紹介されている。『時慶記』天正 15 年 6 月 8 日条に、「ソロリト云狂言仕（師）参、物語申候、唐人ノマネヲ仕也」の記事がある。五畿内のキリシタンを代表する敬虔な信徒の一人であったシンサ・ガヨが唐人の真似をしたとは思えない。松田毅一は、曾呂利新左衛門の経歴はまだ不明である、としている。